第３章　まちの特徴　－個性、長所（強み）、短所（弱み）－

１　横須賀のまちが形成されてきた営みをいまに伝えるまち

●尾張徳川の横須賀御殿にはじまる、まちの発展の歴史

・江戸初期、尾張藩二代藩主「徳川光友」公が横須賀御殿を構えて以来、横須賀のまちは町方と称され、それまでの漁村から、その後の行政、商業の中心としての発展の礎が築かれることとなりました。

●横須賀御殿とともに形づくられた、東西南北の町割

・徳川光友の別荘として建てられた横須賀御殿は、本丸を持たない城とみなされ、横須賀のまちは城下町として町割が行われ、現在の東西南北の道筋が整備されました。

●知多の行政、商業、物流の中心として栄えてきた面影を残すまち並み

・徳川光友の死後横須賀御殿は取り壊されたが、跡地には代官所が設けられ、横須賀は知多地域の行政、商業の中心として発展してきました。現在のまち並みは、商業の中心として栄えてきた名残を伝えるものでもあります。

●昔ながらの伝統的な建物を生かした商店やまちなみとの調和への配慮がなされたまち

・国道１５５号沿いには伝統的な町家の趣を残した商店が現存し、格子や瓦屋根の商店も残っています。また、町方の愛宕神社参道には、老舗のせんべい店本舗が町家の趣に調和した店舗を構えるなど、伝統的な建築と、それと調和した様式でまち並みを形成しようとする関係者の配慮も感じられます。

２　伝統的な文化を引き継ぐまち

●愛宕神社の例祭を起源とする「尾張横須賀まつり」などの伝統芸能

・徳川光友が愛宕神社を参拝するようになり、横須賀まつりは愛宕神社の例祭に合わせて、当初傘鉾まつりとして始まったとされており、江戸末期に５台の山車を曳きまわすまつりになりました。山車をまちかどで回転させる「どんてん」が横須賀まつりの見ものであり、江戸期から続く祭礼は現在も地元に引き継がれています。

●市指定文化財にもなっている５つの山車と山車蔵、玉林寺などの寺社

・まつりの山車にはからくり人形が据えられ、市指定文化財にもなっています。山車を格納する伝統建築の趣を生かした山車蔵が、まちのなかに５ヶ所設けられており、まち並みのアクセントにもなっています。

・愛宕神社、玉林寺、大教院などの社寺仏閣は地域の行祭事の中核であり、人々の暮らしの拠り所になるものとも言えます。

●木造の伝統的な「黒鎧下見」や「格子」の建築物が点在

・横須賀の家屋は、黒塗りの「鎧下見」が特徴的となっています。今でも横須賀の市街地には、伝統的な「黒鎧下見板張り」の重厚な建物が残っています。また、国道１５５号沿いには、往時の商店街の繁栄を偲ばせる、瓦屋根、格子の町家も残り、修復しながら現在も使われているものもあります。

●醸造業や織布業などの伝統産業の文化

・大正から昭和にかけて、横須賀は西知多の政治経済の中心であり、酒、みそ、しょう油などの醸造業や木綿などの職布業が盛んでした。残念ながら、これらの産業は衰退してしまったが、現在も醸造会社の工場が操業しています。

・地元の漁師に伝わっていた、海老のすり身をあぶり焼きにした「えびはんぺい」を加工したえびせんべいを製造する会社が明治に創業し、老舗店舗として現在も横須賀の地に本店を構え、経営を継続しています。

●江戸中期の新田開発、昭和の愛知用水の完成、現在のフキ栽培など時代の先端を行く農業文化

・東海市の農業は、明治期にタマネギ、トマトなどの西洋野菜栽培が盛んとなり、昭和に入ると球根や観葉植物の栽培もいち早く取り入れてきました。昭和３０年から始まった愛知用水事業により農業の高度化、近代化が進み、現在では全国一の生産量のフキをはじめ洋ランなどの都市近郊農業地帯となっており、調査地区周辺に広がる農地でもこうした農業が盛んに行われています。

３　昔ながらの木造住宅の密集した路地と暮らし

●古い木造住宅の密集した地区の存在

・新築・更新が増えているとはいえ、古い木造住宅の密集した市街地は広範囲に広がっている状況にあります。

●狭小な路地と暮らし

・密集した市街地には幅員４ｍに満たない狭あい道路が多く、自動車の通行も困難な道路もみられます。

・狭小な路地は、一方で人々の日常のコミュニティ空間ともなっており、鉢植えや生け垣などの植栽やバイク、自転車の置き場などに利用しているケースもみられます。

●まちを愛する人々の心、連綿と続く地域のコミュニティ

・一大イベントである横須賀まつりは、経験を積んだ高齢者から若者、子どもたちへと伝承され、まつりを維持する地域の人たちの深いつながりや、まちに対する愛着を育んでいます。組ごとの競い合いも、強固な絆を形づくっているものと考えられます。

４　変わりゆくまち

●駅前広場、横須賀駅西通線などの基盤整備が進行

・名鉄常滑線の高架化、駅舎の移設整備、駅東口の土地区画整理事業など、都市基盤の整備が進み、遅れていた西口も駅前広場や横須賀駅西通線の整備がはじまろうとしています。

●スポーツ・レクリエーション、文化の拠点が形成

・地区の北部には市民体育館や近傍の元浜公園、元浜スポーツ広場などが整備され、スポーツやレクリエーションの拠点ともなっています。また、かつての入江を埋め立てて整備された公家緑道は住民の憩いの場となっています。

・さまざまな市民活動団体の学習、文化活動の場となる文化センターや市民の余暇活動、文化教養などの研修の場となる勤労センターなども立地し、文化の拠点としての役割も担っています。

●通勤駅としての利便性の向上、マンションの立地が活発化

・名鉄常滑線は、名古屋と中部国際空港を結び、尾張横須賀駅と名古屋は約２０分で結ばれ、特急、急行、普通列車合わせて１日２２４本が運行されており、通勤駅としての利便性が高い状況にあります。このため、駅周辺には高層のマンションの立地が目立ちます。

●漁業や海運、製塩など海とともに生きてきたまちから遠くなる海岸線

・美しい海岸線は、徳川光友が「臨江亭」とも称される横須賀御殿を建てるほどでした。遠浅の海は海苔の一大生産地であり、万葉の時代から製塩が行われ、平城京に送られていました。漁業や海運も盛んで、海と共に生きてきたまちでしたが、現在では工業用地の造成のため、海岸部は埋め立てられ、一部に岸壁の堤防跡が残るのみとなっています。

●新しい住宅建設の増加とともに、失われつつある古いまち並み

・昭和４５年（１９７０年）以前に建てられた築４０年以上の古い住宅が多い一方、町方でも住宅の更新が増加しており、伝統手的な建物のまち並みは姿を変えつつあります。そのなかにあっても、昔ながらの建物の風情を残しつつ修復・再生したり、新築であっても古いまち並みに調和したデザインを取り入れるなどの工夫もみられます。

●進む空洞化により、空き地、空き家が増加、商店街の連続性がなくなり、目立つ空き店舗

・旧来の市街地の空洞化や高齢化が徐々に進行しつつあり、空き地や空き家、荒廃した建物もみられます。国道１５５沿道の商店街も、店舗や商業施設の連続したまち並みは失われ、空き店舗や商業系以外の建物も増加しています。